

心理劇への招待 (二)



鈴木 隆子
中村 悦子

私たちは、日ごろの生活のなかで常に新しいものを求めながらも、新しいものの出現を恐れてはいはしないでしょうか。心理劇では、新しい状況の中で、各自が異なった役割をとって自発的にふるまうようにします。その場の人間関係の動きから新しいふるまい方がみちびかれます。そして、そこでの新しさは、次の瞬間には、くずされていきます。

心理劇では、用意された筋書きにそって筋書き通りに役をとってふるまうことは、要求されません。劇の筋書きは、演者相互の役割体験を通して、変化発展していきます。

筋書きのない劇に構えてのぞんでも、そのかまえが劇からその人を孤立させ、相手との関係を遮断することになります。劇に構えてのぞんで、自分の思い通りにふるまおうとしても、相手のある

ことです。ひとりで考えていいと思ったことでも、しばしば受け入れられなかったり無視されることになります。

「今日は、子どもたちが騒いで困る、静かにしなくてはいけないとき、どのように振るまったらよいかということ、私はこうしたらよいと思う方があったら、監督になっていただいて、その場面をやってみましょう。」

参加者のひとりが発言しました。

「私は、教員生活の長い経験から割り出して、そんなときあまり困らなくなりました。それは、」と話しかけました。司会者は、そこで監督に変わって、言いました。

(あつ、先生、それをことばでおっしゃらないで、いつも教室で

やっていらっしやるようにしていただいけませんか。ここにいる人たちは、みなさん生徒になりましょう。先生、恐れ入りますが前の方に出てきていただいて。」

先生は、この場で「先生」の役をとって舞台の方に近づきました。

監督「先生の受け持ちは何年生にしましょうか。」

「今は、四年生です。が、何年生でも、小さい子でも。すぐ静かになりますよ。」

監督「では、ここは教室、みなさんは四年生の生徒です。どんな子どもになりますか。いろんな子がいますよ。自分のなりたい、四年生の子になりましょう。男の子でも女の子でもいいです。おとなしい子、いたずらな子、何でもいいのです。では、先生、この入口からはいつてくることにしましょう。はい、と言ったら、みなさんは、それぞれ生徒で、先生は適当なところで入ってきてください。はい、教室です。」

劇がはじまりました。

子(A)「ねえ、けんちゃん。先生おそいから、遊ぼうか。ボール投げして。」

子(B)「いやだよ。ボールは外でしなさいって言ったよ。」

子(C)「わたしするよ。」

子(D)「あした百合子さんの家に、いかない。」

みんなは、わいわいがやがや言い出しました。立ちあがって歩き

出した子どもにつづいて、また二、三人立ちあがりました。

そこに「先生」が入ってきました。先生は、みんなの前まできて、立ちどまり、ひとわたり見渡してから、手をパンと、たたきました。子どもになった人たちは、ちよつと静かになりました。

先生「これでおわりです。」

子どもたちは、また、がやがやしはじめました。

子(A)「先生。ちよつと。」

監督「ほら、先生。先生はおわりでも、子どもたちはまだ何か呼んでますよ。もう少し続けてください。」

先生「いえ、こうすればたいいは静かになるんです。私の場合。」

子(C)「先生、ボール投げをしていい。」

子(E)「何してるの、先生。手をたたいたと思ったら、どこかへ行っちゃってさ。」

先生「何です。みんな、きょうはお行儀が悪い。はい、そっちにいる子もすわりなさい。こっちを見て。ボールをなげている人、すわりなさい。」

先生がボールを投げ合っている子どもの方へ近づき、席につれもどしていると、ちがう子どもが歩き出します。

子(F)「先生、早く。」

机にすわっている子どもは、机をたたいて先生を呼びます。

先生「そう、君は。ちゃんとすわって。はい、あなたはこっちへ

きて。」

まだ席につかない子どもがいます。

先生「こんな生徒はいませんよ。みんなちゃんとしていますよ。」

監督「はい、やめ。こちらは先生をおやりになって、こんな生徒はいないと思ったのですね。ほかの方は？」

「いますよ。ぼく今ここでそんな生徒をしたんです。」

「ええ、こんなことありますね。こっちを仕まつしていると、あちらが騒ぎ出す。あちらに注意をしにくくと、こちらが動き出す。今の劇をみていて、教師がひとり合点で静めようとしているところを、自分の身に比べて反省していたんですが。」

「私はさわぐ子どもになって気持ちが悪かった。別に先生を困らせようと思ってさわるいではないのです。先生の話もきくけど、今ちょっと言いたいんだという気持ちでした。でも、おわりの頃に、けんちゃんはきちんとしていいねなどと比較されると、しやくにさわっちゃったな。」

「パンパンと手をたたけば静かになるなんて先生、ひとりじめです。手をたたかれたそのときは驚いて静かにしたけど、そのまま口を封じられちゃ。先生、ずるいな。」

「ほう。じゃ生徒がしんとするのはあんまり気持ちよくやっつるわけじゃないのかしら。」

「そうですね。先生はもっと生徒の中にはいってきて、そこで静かにする体制をつくらなくては。」

監督「はい。いろんな意見が出ましたね。もう少し生徒の中にはいってということも出てきましたが、ひとつ、あなたその気持ちで別な先生をやってみましょう。今、先生をやった方は、自分のなりたい生徒になってください。」

ここで、劇の監督について、述べましょう。

監督が劇を進めるときには「別のやり方、別のかたち」をみつけるように、運びます。

監督は、演者への役割規定がなるべく大きくならないように、役割の内容や役割については、あまりくわしく話さないこと。自発的にふるまうことを中心にする心理劇では、「わくづくり」をひかえます。

監督は、劇の促進者で、劇の発展の担い手としても重要な役割を負っています。しかし、監督が、この役割に固定していることは、ゆるされません。自分も演者になってふるまうことによって、心理劇の全体的発展がもたらされます。また、演者が監督の役割をとれるようになることも、大切です。こうして、その場の関係が新しく結ばれていくことは、劇の効果をたかめます。

劇のあとの感想がその場で話されるときは、劇で役割をとった人のその役割についての感想を観客が述べ、その役割における感想として、演者の感想が述べられることが必要ですが、現実のその人と劇中の役をとったその人とが混同されやすいので、監督は、その点

をおさえ、まず、観客の劇をみての感想をきき、最後に、演者の劇体験の感想その他をきくようにします。

前の劇で「先生」の役をとった先生は、今度は愉快な腕白小僧になり、劇後の感想で、とても楽しかったと、感想を述べました。先生の役をとった人は、実際にやってみると、まとめようまとめようと思うため、はずれる子に対しては叱りたくなり、きちんとしている子はやっぱりほめずにはいられない、ふしぎだな、と言いながら、舞台をおりてきました。子どもの役をとると喜喜としてふるまえる人が、先生の役をとると、かたくなな、なにか絶対的なものを信じているように、ふるまうことがあります。これは役割のもつ規定性で、その人がこの役はこうあるものだと考えたり、社会でそう期待している先生らしさに、自分がはまってしまうからでしょう。そうなる、その先生は、今ここにいる子どもたちの期待する先生から遠くなり、今ここで自分が自発的に振るまいたい気持ちも、一般的な通念である先生らしさに押されて、かくされてしまいます。外からの期待と自分の自発性、そして刻々に変化する今ここでの関係把握などが、不調和になってしまいます。

劇の途中で、このような役割のとり方から、しばしば劇がとだえることがあります。このようなとき監督はどうしたらよいでしょうか。新しい演者（補助自我）を投入する方法があります。また、場面設定を新しくする方法もあります。演者相互の役割交代をする方法

もあります。演者を観客にまわして、新しい演者を登場させ、今の劇のその先を演じるように運ぶ方法もあります。

それらの場合に、監督は、次のようなことに気をつけねばなりません。舞台の上で劇を演じているものと、舞台の下で劇をみているものとの間にはひらきがあります。監督や観客には、演者の様子が立ち往生にみえることがあっても、演じている本人にとっては、それほどには感じられていないときがあります。

静まりかえった劇場の中で、監督は、舞台の前をひとりごとをいしながら、ゆっくり歩いています。そのことは、ほかの人にはあまりよくきくことができません。

しばらくすると、監督は観客席からYさんをさそって、舞台の下に立ちました。監督は、通行人の役をとって、Yさんに近づき、話しかけました。

通行人「ちよつと、おたずねしますが、このあたりにハンドバックスが落ちていませんか？」

Y（補助自我）「なんのことですか。それは、突然のことで、え？」

通行人「いいえ、私が今このあたりに落としたので、あなたにたずねているのです。」

Y「それは、どうもお気の毒さま。」
通行人「失礼いたしました。」

監督は、舞台を降りて、演者をつづいて舞台にさそいながら、
監督「さあ、相手をなににみたててもよいのです。あなたのご自由。」

Pさんは、しばらくだまって窓の外を眺めていましたが、Yさんの挨拶に答えて、

P（演者）「お元気ですか。随分お年をとって、もう三年もたちましたかしら？ 早いものですね。」

二人は、笑いながら沈黙。

監督「はい、どうも、そこで。」

二人は、席にもどりました。

監督「どなたでも、この先をつづけてください。あ、そちら、なさいますか。どうぞ。」

補助自我のYさんは、再び役割を交代し、新しい演者といっしょに舞台の上をしばらく歩きました。

Y「昔も今もかわりませんね……。」

R「いいえ、私は何んにも覚えておりませんよ。一と昔前のことですから。」

Y「私は、なにかたべたいけれど、そちらは。」

R「すきやきでもどうですか。」

Y「大好きです。どこまでもご一しよさせていただけますよ。」

観客席から、笑いが起こりました。

監督「はい、そこで随分時間がたちました。すきやき屋を出て、

ここは夜のプラットホームです。そこから、またつづけてください。終電車にまにあうでしょう。」

Y「今日は、おもいがけなくごちそうになって。どうも。」

R「たいしたこと、ないですよ。」

Y「おそくなりましたね。これからどちらへおかえりですか。」

R「吉祥寺です。」

監督は、舞台に新しい演者を投入しました。

F「もう、電車はありませんよ。お客さん。」

Y「え。かわったんですね。」

R「やれ、困ったねえ。」

二人は、しばらく沈黙。

Y「どうしよう。」

R「ひろいますか。」

監督「はい、そこで。」

監督は、そこでストップをかけました。

*

*

*

*